オピニオン

一刀領談

本紙客員論説委員 下條正男

アシカ巡る虚偽報道

無分別な乱獲は韓国側

2月27日、韓国の「聯合ニュース」（電子版）は、日本による無分別な乱獲が独島（竹島の韓国名）のアシカの絶滅原因だったとし、それを科学的に立証ができたと報じた。これは海洋水産部の研究支援を受けた釜山大チームが、アシカの「適合個体数推定モデリング」方式により、1904年以来のアシカの個体数を推定した結果で、その研究成果は既に国際学術誌（SCI）に発表済みだという。

だが報道された「年度別アシカの推定個体数」（図表）と、国際学術誌に掲載された「年度別アシカの推定個体数」とでは大きな違いがある。韓国国内で報じられたアシカの生息数は、41年時点でゼロとなっているが、国際学術誌では51年に60頭が生息していたとしている。

それに戦後の日本は、竹島でアシカ猟ができなかった。「マッカーサー・ライン」が設定され、日本漁船は竹島に接近できなかったからだ。51年時点で、竹島のアシカはまだ絶滅していなかったのである。

■豚肉に近い肉味

事実、2017年7月12日付の「朝鮮日報」（電子版）では、1947年8月20日、朝鮮山岳会（後の韓国山岳会）が竹島調査をした際、アシカを撮影した写真が発見されたと報じている。それも死んだアシカの子を誇らしげに持った写真と「甲板に独島アシカ3頭が横になっている」写真があるとしているので、調査隊が捕獲したものだろう。

調査隊に参加した一人は「アシカの肉味は豚肉に近く」と、体験談を語っており、試食したのであろう。調査隊がアシカに関心があったのは、朝鮮時代の『東医宝鑑』でもアシカの生殖器（海狗腎）を滋養強壮剤として、「甚だ貴く得難し」としているからだ。

事実、60年代には、鬱陵島（現在の韓国・鬱陵島）の金某氏は、警察署長の求めに応じてアシカ1頭を捕獲すると、お礼に「麦を2叺（1叺＝76・5キロ）ももらった」という。警察署長が求めたのはアシカの海狗腎である。

これらは、戦後も竹島にはアシカが生息していたという証しである。50年代半ば、竹島に上陸していた独島義勇守備隊の複数の隊員が、「当時、アシカは最小限700頭余りが生きていた」と証言していることでも明らかだ。60年代も同様で、竹島に駐在した海洋警察隊員と漁民が「数百頭が生息していた」と証言している。それは70年代初頭も変わりがなかった。工事のため竹島に渡った鬱陵島の島民が「当時、数百頭が生きていた」と証言しているからだ。

■保護は実現せず

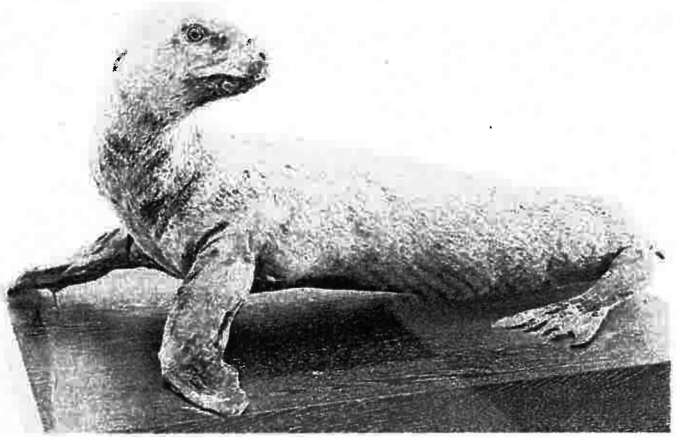
なぜ、竹島のアシカが急減したか。2016年6月13日付の「慶尚毎日新聞」（電子版）はその理由の一つとして、「アシカの海狗腎と肉を得るためで、独島を警備していた隊員が（アシカを狙って）独島の東島頂上から機関砲を撃ち、射撃訓練をしていた」と報じている。隊員の中には「海狗腎を政府の高官や軍の上層部に上納していた」と証言する者もいたという。

さらに竹島周辺でイカ漁など漁業が盛んになると、集魚灯近くにアシカが出現すると魚が逃げるため、漁師らが追い払ったのだという。戦後、1970年代まで竹島に群生していたアシカは、漁師たちによって生息地から追い出され、繁殖地を失ったというのが歴史の事実に近い。

そこで76年8月、韓国の梨花女子大学の調査チームが竹島を訪れた際にアシカが生息していたため、その保護を叫んだというが、実現しなかった。

釜山大チームは、アシカの「適合個体数推定モデリング」方式で計算し、竹島のアシカを絶滅させたのは日本の無分別な乱獲が原因とした。だが、無分別な乱獲をしていたのは、韓国の人々だったのである。

＝随時掲載＝



竹島周辺で捕獲されたアシカの幼獣の剝製（資料）

しもじょう・まさお　長野県出身。国学院大大学院博士課程修了。1999年から拓殖大教授を務め、昨年3月末で退官。現在は本紙客員論説委員のほか、島根県立大と東海大の客員教授。島根県の第5期竹島問題研究会の座長を務める竹島研究の第一人者。71歳。